

【唯物論研究協会 30 周年記念企画のご案内】

唯物論研究協会創立 30 周年記念パネルディスカッション

「戦後思想における全国唯研の歴史と現代の課題」

◇会場 キャンパスプラザ京都 4 階第 4 講義室

◇時間 16 時 30 分～19 時 30 分

◇パネラー

中村 行秀（元・千葉短期大学） 後藤 道夫（都留文科大学）

佐藤 和夫（千葉大学） 牧野 広義（阪南大学）

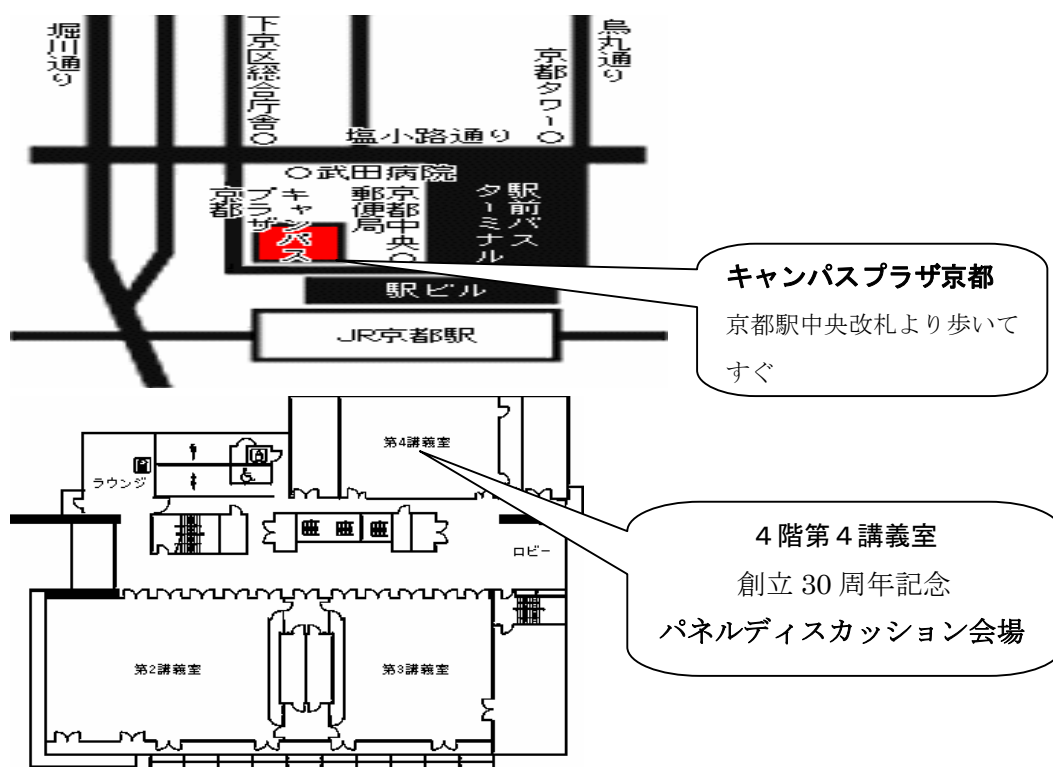
尾関 周二（東京農工大学） 浅野 富美枝（宮城学院女子大学）

三崎 和志（法政大学他非常勤講師） 橋本 直人（神戸大学）

◇司会 中西 新太郎（横浜市立大学）

◇会場案内図

キャンパスプラザ京都



《ご案内》

唯物論研究協会（全国唯研）は、本年10月に創立30周年を迎えます。この記念すべき節目に、下記の通り、パネルディスカッションを開催し、戦後における全国唯研あるいは唯物論研究の社会的位置について歴史的総括を行いながら、現代の課題を確認しあう機会を設けることに致しました。具体的に取り上げられるテーマは、1) 戦後におけるマルクス主義の社会的位置。特に近代化の評価やスターリン主義批判、2) 戦後思想を唯物論はどう評価するのか、3) 実践的唯物論論争とは何であったのか、4) エコロジーやフェミニズムに対する唯物論の応答、5) ハーバース、アーレントらとの対話、6) ポストモダンと唯物論、などです。

パネラーは、創立以来の会員から若手の会員まで8名の方にお願ひし、盛り沢山の問題提起をお願ひしました。皆さんの多数のご参集を賜りますよう、お願ひ申し上げます。

《パネラー発言要旨》

○中村行秀：戦後の唯物論と唯物論研究協会

戦前の唯物論研究会もふくめて、日本の唯物論研究を基本的に規定してきたのはいわゆる「マルクス・レーニン主義」哲学に対するかかわり方（受容・批判・克服）だといえる。この観点から、戦後の「民科」、「日本唯研」などの流れの中での「唯物論研究協会」の設立と現在に至る活動の意義を報告する。

○後藤道夫：戦後におけるマルクス主義の社会的位置

戦後マルクス主義の思想と運動は、近代的自由権と大衆民主主義、および20世紀的社会権を日本に実現する先頭にたちつつ、同時に、近代を超える社会主義運動を代表した。この二つの目標の予定調和的把握が、日本型大衆社会の形成・展開・収縮とソ連社会主義の形成・崩壊に對し、どのような対応を生んできたのか、考えたい。

○佐藤和夫：21世紀の唯物論のあり方について

唯物論という言葉が登場した17世紀から18世紀にかけて、唯物論者たちは、この現実世界において、神なしでも豊かに生きていける可能性を示した。それでは、資本主義が極限まで発達して、その冷酷さにうんざりしている現代社会に対して、唯物論はどういう可能性を示しうるのか。「批判」にとどまらない「始める」創造的な唯物論の可能性について考えたい。

○牧野広義：実践的唯物論論争について

「実践的唯物論」という言葉は、戦前に戸坂潤も使ったものである。ここでは、1970年～80年代に日本の唯物論研究者の間で行われた「実践的唯物論論争」をふり返りたい。この論争は、「現存する社会主義体制」が存在する時期に、旧ソ連型のマルクス主義哲学を克服する過程での論争であった。ここでは、一方では、マルクス主義哲学のアクチュアリティを回復するために、実践や労働の概念を哲学の根底にすえて、史的唯物論をマルクス主義の体系全体に貫徹させる必要があると主張された。それに対して、他方では、精神と物質にかかわる「哲学の根本問題」は曖昧にできず、支配的思想である観念論への批判のためにも、意識の能動性を唯物論

的に明確にし、認識論を重視した議論を展開すべきだと主張された。私は、現時点では、マルクスの原典にも立ち返って、現実を「実践」としてとらえ、「自然の根源性」をふまえ、「人間と自然との物質代謝」の再建と「協同社会」を実現するための、弁証法的唯物論の展開が必要であると考えている。

○尾関周二：エコロジー・コミュニケーション問題と唯物論

唯研を中心とする私の40年近くの研究活動を振り返ると、大きくはマルクス思想の現代的革新の追求であったといえる。それは同時に、現代という時代が提起する主要な問題に、資本主義批判をはじめマルクス思想の核心の現代的可能性を生かす仕方に取り組むことでもありと考へ、言語・コミュニケーション問題とエコロジー問題を主に取り上げて議論してきた。

○浅野富美枝：唯物論とフェミニズムとの対話

わが国で唯物論とフェミニズムの間に〈ラポール〉(率直な対話を可能とする関係)が形成されたのは1980年代後半だった。その〈ラポール〉の形成に唯研はどのような役割を担ったのか。また、課題を共有することの多い唯物論とフェミニズムの対話と接近遭遇は、両者とりわけ唯物論の側に何をもたらしたのか。その経過と現段階および今後に関して私なりの整理を試みたい。

○三崎和志：唯物論とポストモダン

ポストモダンという思潮に対して90年代以降、マルクス主義的立場からの批判的吟味が行なわれ、現在の資本主義の動向との関連が問われている。ただし、ポストモダンの提起した問題群の中には、たんなるイデオロギー批判で済まされないものがある。その問題にどう対するかで、唯物論の水準が逆に測られることになるだろう。

○橋本直人：現代における批判的思想の課題と唯研の射程

2001年のいわゆる同時多発テロ以降(実際はグローバル化の進展とともにテロ以前から始まっていたが)、むき出しの暴力と敵意、排他意識の横行する状況は目を覆うばかりである。唯研にとっての大きなテーマの一つである個人の(特に現代日本の青年層の)意識やアイデンティティの問題に対しても、この状況がすさまじい作用を及ぼしていることは言うまでもない。この報告では、こうした動向を背景とした唯研の近年の取組みを概観しつつ、やはりテロ以降の状況下で改めて注目されるポスト・コロニアルの思想と対置して検討したい。特に現代における暴力と排他意識、およびアイデンティティ(・ポリティクス)の関連を手がかりとして、若干の問題提起を試みたい。